



巻頭言

今号の特集企画は「外から見た日本の台湾研究」です。松田ヒロ子、吉田真悟両幹事のご尽力で、三篇の魅力的なエッセイが揃いました。私たちは、外からの視線との出会いなくして、自分が何者であるかを知ることにはできないのだと、改めて実感します。

私が長く勤めたアジア経済研究所には、アジア、ラテンアメリカ、アフリカを専門とする地域研究者たちが多数在籍しています。日本との歴史的な関わりや交流が少ない地域、日本に対する感情が厳しい国を研究している同僚たちの話を聞くにつけ、自分が台湾研究者として享受している「日本人ボーナス」の大きさを痛感させられたものでした。ある同僚には冗談交じりに「日本の台湾研究者は台湾にスポイルされているよね」と言われ、むっとして反論しながら、私は確かに台湾に甘えているなと胸に手を当てたこともあります。

むろん、一言で「台湾研究」といっても、研究手法やテーマによって「ボーナス」の有無は異なります。日本人であること、あるいは日本の組織をベースにしていることが台湾研究を進めるうえで足かせになっている会員もいらっしゃるでしょう。しかし私自身は、台湾の人々が日本からの客人に寄せる好意と、台湾社会が研究者や大学院生に対して示す寛容・理解という二重のゲタを履いて、日本ではできないようなインタビューや調査をしてきました。近年では、日本社会における台湾への関心の高まりにより、生煮えの分析で執筆や講演をすることもあり、三つめのゲタを履いていると思うことがあります。

この状況にどう向き合えばよいのか。ゲタは脱ぐべきなのか、そもそも脱げるものなのか。脱げないものを脱いだ気になるより、ゲタを履いた足を踏んばって、1メートルでも遠くまで見渡し、1センチでも遠く研究成果を届けられるよう、力を尽くすことのほうが、責務を果たすことになるのではないかと。台湾との付き合いの年月が重なるほどに、迷いは深まります。

とはいえ、他の国々を研究している研究者から「台湾に甘えている」と言われるようでは、台湾に対して申し訳がたちません。台湾の研究者の成果に学びつつ、それとは異なる「外からの視点」をどう獲得できるのか。台湾の社会と人々への敬意を抱きつつ、そこから適度な距離を保ち、時には冷めた目で台湾社会を観察できるのか。本学会が、会員一人一人にとり、外から台湾を見る目を磨いていく研鑽の場であることを願っています。



川上桃子 理事長

学会運営報告

第14期常任理事会において、下記の検討を行いました。

- 第28回学術大会関連
- 理事選挙電子化に伴う規約改定案
- 若手の研究活動助成制度
- 学会活動に伴う各種経費
- 会費長期未納者の規約に基づく退会措置
- 「戦後日本における台湾関係文献目録」の公開方法変更

★ 常任理事会、理事会、会員総会の抄録は学会HPより閲覧が可能です。

(<https://jats.gr.jp/rijikai/rijikai.html>)

重なり合う視線と空白：一人の台湾人社会言語学者が捉える日本の台湾研究 (陳麗君／国立成功大学)

今回、日本台湾学会（JATS）より「外から見た日本の台湾研究」というテーマをいただいた。この「外部」という言葉を前に、私はまず「距離」の本質について考えさせられた。デジタル・アーカイブが高度に発達した今日、この距離は単なる地理的な隔たりではなく、言語の慣性、史料へのアプローチ、そして学術制度が織りなす「位置性（Positionality）」の問題である。

史料パスの複線性と言語的主体性

日本の台湾研究は、旧慣調査や植民地政策論といった「統治の知」を基層として発展してきた。そのため、日本の研究者の外交史料館や防衛研究所等の日本語史料に対する近接性は、我々台湾の研究者から見ても、常に羨望と敬意の対象であった。しかし、社会言語学者としての私の視点からは、一つの非対称性が見えてくる。台湾側では、国史館台湾文献館や中央研究院台湾史研究所を中心に、総督府档案の解読教育が制度化され、その成果は『台湾総督府档案抄録』等の形でも蓄積されている。対して、日本側において「日本語で書かれた公文書」を扱う際、とすれば台湾側が築いてきたこうした档案解読の知見やコンテキストとの照合が看過され、単線的な公文書叙事へと収斂してしまう懸念はないだろうか。こうした史料利用の偏りや「日本側史料への依存」は、JATSの20周年回顧においても、研究の客観性を担保するための課題として指摘されている（菅野, 2019）。日本語が「読める」ことと、植民地期の言語的重層性を「解読（デコード）」することの間には、依然として埋められるべき空白がある。「史料の往還」の精度こそが、外部の傍観者と、深い対話者とを分かち境界線となるだろう。

「権威」への応答と高密度の実践

国際的な台湾研究の場では、知識生産のあり方への問い直しが進んでいる。欧州のEATS（2024）が「主体性と位置性（Subjectivity and Positionality）」を主題化し、北米のNATSA（2026）が「知識生産の非対称性（Asymmetry in the Production of Knowledge）」を問う中、JATSの際立った特徴である驚異的な頻度の「定例研究会」は、圧倒的な組織動力として若手の議論を支えている。しかし、この動力が「議題の慣性」を生んでいる側面も見受けられる。大会プログラムを概観すると、文学や歴史の厚みに対し、社会言語学や言語政策といった、言語を権力動態として捉える横断的な研究は個別的な発表に留まっている。言語は単なる「調査ツール」ではなく、今この瞬間も台湾社会の変容を刻み続ける「生きたアリーナ」である。

言語植民政策と移行期正義への視座

特に2026年のEATSが掲げた「権威の残響（Echoes of Authority）」という視点は、我々に重要な示唆を与える。日治時期の遺産のみならず、その後の権威主義体制による「言語植民」のプロセスをいかに捉え直すべきか。日本の台湾研究が、戦後の権威主義体制が言語に刻んだ傷跡や、現在進行中の「言語政策の移行期正義（Transitional Justice in Language Policy）」という視点を見落としてしまうならば、それは台湾社会の「今」から乖離した外部に留まることを意味する。多言語主義への回帰と母語の復権は、台湾の民主化を真に完成させるための不可欠なステップであり、日台の研究者が共に解明すべき喫緊の地政学的課題である。

「外部の視線」を、単なる距離のある観察者によるものに留めてはならない。それを、互いの権威の残響を聴き取り、新たな知を生産するための「協働の技法」として制度化すべきである。日本の台湾研究が持つ史料への誠実さと、台湾側が追求する主体的な変革のエネルギーが、言語政策の転換点において真に交差するとき、台湾研究は地域研究の枠を超え、普遍的な公共知へと成熟していく。日台の学術共同体によるこの「対話の深化」こそが、不透明な地政学の時代において、我々を繋ぎ止める最も強靱な絆となると確信している。

フランスから見た日仏の台湾研究 (アルノ・ナンタ／フランス国立科学研究センター)

台湾に関する研究は、人類学、文学、歴史学、政治学の四つの学問が主に推し進めているものと言えよう。量的に台湾を一番数多く研究する、日本の人文社会科学においては、この四つの側面が対等な割合を有しているが、しかしフランスの事情はどうなのか。遺憾ながら、フランスにおいては以下紹介する幾つかの原因がゆえに、事情がだいぶ異なっている。フランスの高等教育つまり大学制度において、新規教員（教授・准教授）の雇用は、一方では（日本のように）推定された学生数を考慮して、他方では中学高校の教員採用制度（CAPES=中等教育教員適性証、そしてアグレガシオン=中高等教育教員資格）を考慮して、行なわれるという特徴がある。つまり、フランスの大学では、特に歴史学、文学、哲学の場合に（またはより少ない割合で経済学、地理学、社会学の場合も）中学高校に雇用される教員らが受ける採用試験の課題を教えることのできる教授・准教授が必要なわけである。問題は、CAPESとアグレガシオンの採用試験における作文試験の課題が、いまだに、ヨーロッパと古代地中海を重視していることである。これがゆえに、ヨーロッパ広域と古代地中海広域を専門とする教員らは、大学における新規雇用に当たって、依然として優遇・優先されるという学術環境が持続しているのである。（狭義の大学の他に、基本的に純粋研究機関であるフランス国立科学研究センター=CNRS、高等社会科学院=EHESS、極東学院=EFEO、高等研究実習院=EPHEは、そうした制限を受けていないが、しかし全体的な人員は少ない。）

フランスの大学においては、日本語、中国語、そしてこの20年間は韓国語も広く教えられている東アジア言語文化学科はもちろん存在している。しかしながら、専門的な学問はこれら学科の中のごく一部を成すに過ぎず、語学の授業、文学の授業、そして場合によって言語学の授業等々が、授業や講座の大部分を占めている。例えば、<歴史>という専門的な学問は、全体として、東アジア言語文化学科においてではなく、歴史学科で教えられており、同時にこうした歴史学科では、<東アジア史>はほぼ皆無の状態である。最後に、台湾研究が特別な意味を有している日本の学術環境とは異なって、フランスの大学の中の東アジア言語文化学科内の中国科では、（以下に紹介する例外もあるが）「台湾」を取り扱う授業はほぼ存在しておらず、かつそれゆえに、中国科の為の新規教員採用試験に当たって、「台湾」はほぼ一切視野に入らないのである。

では、フランスにおいて台湾を専門とする教員と研究者は、どれくらいいるのか。台湾研究は、上記のように4つの側面が存在していると思われるが、日本における台湾研究とは異なり、フランスでは、上記の原因もあって、台湾研究は主に人類学と地政学が担っているものであり、歴史学と文学はごく一部を成すに過ぎない現状である。つまり、フランスにおける台湾研究は、数が少ない上に、アンバランスな傾向が確認できる。日本研究と中国研究は別にして、「東アジア」は長らく人類学の研究対象となっていたという「伝統」もあり、現在のフランスの学術環境において、東南アジア諸国は依然として、もっぱら人類学が研究する地域であり、この点に関して（東南アジアの一国ではないが）台湾も例外ではない。「人類学」研究というと、日本植民地時代の延長線上に、そしてこうした歴史背景を考慮せずに、客体化された台湾の「原住民」（先住民族）がもっぱら研究対象になっている。その一方で、兩岸関係と現代政治の研究が圧倒的に重要視されているがゆえに、そして、歴史研究は中国語も日本語も必須であるがゆえに、台湾史研究はフランスにおいて、ほぼ皆無の状態である。

では、最後に鳥瞰図を描いてみよう。パリには、パリ＝ナンテール大学のサミア・フェラット（Samia Ferhat）氏は中台関係と記憶の問題を社会学という観点から研究し、同大学のマリー・ロレイヤール（Marie Laureillard）氏（元リヨン第2大学）は中国・台湾文学を研究している。フェラット氏は2017年から台湾研究（French Taiwan Studies）をテーマに、パリ高等社会科学院で台湾におけるアイデンティティと記憶のゼミを開講している。そして、パリ政治学院（IEP de Paris）のフランソワーズ・マンジャン（Françoise Mengin）氏は兩岸の政治学、そして中台の経済関係を研究している。ソルボンヌ大学のヴィクトール・ルーゾン（Victor Louzon）氏は唯一、台湾史（2・28事件史）を研究する教員であり、（地域研究学科ではなく）専門的な学問を中心とする学科（ソルボンヌ大学文学部歴史学科）に就職しているフランス唯一の台湾研究者であるが、氏は現在、中国史学史の研究に移っている。（他の大学教員たちは皆、大学の文学部外国語学科に所属している。）優秀な教員＝研究者が台湾研究から離れるという特徴は、フランスの台湾研究において確認できる傾向である。パリの高等社会科学院のフランク・ムヤール（Frank Muyard）氏は中国の近代を専門としながら、2000年代中葉より台湾考古学・台湾原住民の考古学、そして現代の政治等々を

並行して研究している。他に、リヨン第3大学で博士号を取得した李如玲 (Lee Ju-Ling) 氏は、日本語と中国語をマスターした唯一の歴史学者だったが、就職できずに近年研究活動を完全に停止した。(歴史学者としては、私=ナンタもいるが、主に植民地時代台湾を対象としており、なお台湾は自分の研究の一部のみである。) フランス国立科学研究センターで、パリ東南アジア研究所 (CASE) 所属のジョズィアンヌ・コークラン (Josiane Cauquelin) 氏は先住民族プマの研究を進める人類学者であったが、近年定年退職した。

パリから離れて、フランス北部のアルトワ大学のサンドリーヌ・マルシャン (Sandrine Marchand) 氏は古代中国文学で博士号を取得したが、近年、台湾文学を研究している。リヨン第3大学のグエンアエル・ガフリック (Gwennaël Gaffric) 氏は中国・台湾文学を研究しており (『三体』の仏語翻訳者)、コラド・ネリー (Corrado Neri) 氏は中国・台湾映画研究を進めている。リヨン政治学院のステファンヌ・コルクユッフ (Stéphane Corcuff) 氏は「揺らぐアイデンティティ」を中心に地政学の研究を進めてきた。エクス=マルセイユ大学にあるIrAsia研究所 (人類学に重み) のシャンタル・ジエン (Chantal Zheng)、そしてフィオレラ・アリオ (Fiorella Allio) 両氏は、民族史学という人類学研究を進めている。モンペリエ大学のジェローム・ソルダニ (Jérôme Soldani) 氏は博士論文において人類学から見た野球を研究したが、現在、原住民研究に移っている。他にも、上記のフランスにおける大学の学術環境がゆえに、博士号を取得してもなかなか就職できない若手研究者が多少なりとも確認できる。

最後に、研究機構や学会に関しては、台北に極東学院の事務所があり、そして仏外務省と国立科学研究センターの共同研究所もあるが、歴代所長は有名なジャンピエール・カベスタン (Jean-Pierre Cabestan) 氏 (鄧小平研究など) のように、中国を対象とする研究者が半分以上を占めている。イエズス会の研究者に関しても同じ指摘が可能であり、例えば、台北利氏學社 (Institut Ricci de Taipei) の前社長 (1996-2009) のブノワ・ヴェルマンデル (Benoît Vermander) 氏も、中国の専門家である。極東学院事務所の所長は現在、フランク・ムヤール (Frank Muyard) 氏 (上記参照) である。フランス国内では、法國漢學協會 (AFEC) が台湾も扱っており、その他に法語台湾研究學會 (AFET) という小さな学会が存在しているが、上記の諸氏が必ずしも積極的にこの学会を支援しておらず、現在の会長はポストドクの若手人類学者である。

上記のように、フランスにおける台湾研究は、大学におけるヨーロッパ・地中海中心主義、東アジア学科においては日中韓に重みがあることもあり、結局、就職口が少ない為、薄くて脆弱な研究網を成している。日本近現代史、殊に帝国日本とその植民地における人文科学の歴史を研究する者として、私=ナンタは、フランスの台湾研究は日本のそれに倣って、かつ日中韓に関する研究と同様に、歴史学がもっと広い役割を担うべきものであると思っている。日本の台湾研究がそうであるように、フランスにおける研究も、より広範な台湾分析が可能になるはずである。

**ペンシルベニア州から千葉県へ：
米国の大学院生から見た日本台湾学会第26回学術大会
(ジュリアン・タシュ／ペンシルベニア大学・院生)**

2024年5月26日、日本台湾学会第26回学術大会にて発表する機会を賜った。当日は、筆者にとって初めての日本語による学術発表であり、内容に至らぬ点が多くあったにも関わらず、貴重なご意見を頂戴した。とりわけ、丁寧かつ詳細なコメントをお寄せくださった岡野翔太先生には深く感謝申し上げる。また、パネルに参加してくださった座長の角南聡一郎先生、コメンテーターの平井健介先生、並びに発表者の三文字昌也氏にも厚く御礼申し上げます。本大会での経験は、筆者の研究に深い洞察を与え、米国と日本における台湾研究の相違を垣間見るきっかけとなった。

日本台湾学会で扱われる研究テーマは多岐にわたっており、その幅広さに強い印象を受けた。本学会は社会科学と人文科学が並存する性格を有し、政治史の研究者も複数参加していた。各発表においては、新規の一次史料を発掘し、詳細な検討を重視するという日本の学術的傾向が反映されていたと同時に、日本における台湾研究の蓄積の厚さと成熟度が示されていた。多くの発表は高度な専門性をもつ先行研究に依拠しており、明確に区分された下位分野が複数並存していることが窺われた。

米国においては、台湾研究に関する出版物は相対的に少なく、組織的かつ主題的にも中国史研究の一分野として位置づけられてきた歴史がある。しかし、近年この点には一定の変化が認められている。2010年代から台湾関連の研究書の出版が増加し、2024年にはワシントン大学で台湾研究の叢書が刊行され、2025年のアジア研究学会（Association for Asian Studies）における近代日本史研究学会（Modern Japanese History Association）の会合では、若手研究者の間で、研究対象を台湾や韓国に広げ、複数のアジア言語を扱う傾向が議論された。

しかし、米国における台湾研究は依然として周縁に置かれており、より広範なテーマを扱う研究者との議論を可能にする理論的枠組みの構築が急がれている。その動きには、米国の学術界全体に見られる研究動向が反映されており、例えば、過去5年間に開催されたすべての北米台湾研究学会（North American Taiwan Studies Association）大会において、クィアネス（queerness）に関わる主題を含むパネルが少なくとも2つ以上設けられ、昨年度の大会では人種（race）と関連する発表を含むパネルが4つ設置されていた。

組織の制度面に着目すると、日本台湾学会と米国の学会では、「包摂」（inclusion）に関してそれぞれ特色のある取り組みを進めている。日本台湾学会において整備されている日本語と中国語の通訳体制は、極めて高く評価されるべき特徴である。また、事前に報告論文を共有する慣行は、非母語話者にとって理解の障壁を低減する機能を果たしている。

一方で、米国の学会においては、若手研究者の包摂を促す工夫が強められている。例えば、大会の開催に先立ち、ネットワーキングや学会参加に際しての期待値を説明するセッションを設ける学会がある。また、一部の学会では、初参加者が名札に「初参加」であることを示すシールを貼付し、他の研究者が積極的に交流に引き入れることが奨励されている。これらの取り組みは、学会が組織として若手研究者を積極的に支援する風土を醸成している。

筆者が台湾研究に取り組むようになった動機の1つは、「文化を越えた対話を実現すべきである」という問題意識にあった。日本台湾学会において、日米の学術界を繋ぐ機会を与えていただけたことに、心より感謝申し上げたい。今後も、相互に学び合う関係が継続することを強く願う。



 iRead eBooks

【台湾 E-book コレクション】

Airiti “アリティ”が誇る台湾・中国大陸・香港・マカオ・シンガポール・マレーシア・シンガポールなどの60,000タイトル以上のeBookコレクションが利用可能です。一冊ずつの買い切り購入のほか割安となる全分野・カテゴリーごとの購読購入もお選びいただけます。ご機関様向けに公費お支払にも対応しています。

2025年9月：インターフェースが一新されました。

全世界向けとして利用者体験の向上を目指すリニューアルです。感覚的に使えて、かつ速度も速く使いやすいものとなっています。日本語タイトルも積極的に搭載中。以下のページから収録タイトルをご確認ください。<https://www.airitibooks.com/>



 airiti Library

台湾と中国の学術リソースをプラットフォーム統合した Airiti “アリティ” から台湾発行（一部マレーシア等アジア・世界各地含む）3,000タイトルを精選したE-ジャーナル・コレクションです。SCIE、SSCI、A & HCl、EI、MEDLINE などの国際的に重要な検索データベースに含まれる、優れたジャーナルを主に収集しました。こちらのページからタイトル検索・抄録の確認が可能です。<https://www.airitilibrary.com/>

大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)採択。ほとんどの大学様はコンソーシアム向け大幅割引価格が適用されます。

【NEW】円価格を設定。為替動向に関わらず一定価格となるため購入計画が容易となります。詳細お問い合わせください。

【収録分野・タイトル数】

全 3,080 タイトル('26年3月時点)

人文学：949 誌 / 社会科学：1,271 誌 /
基礎応用科学：335 誌 / 医薬衛生学：676 誌 /
生物農学：212 誌 / 工学：299 誌

【主な導入機関】

台湾：600 機関以上（大学では市場占有率 100%。大学以外にも高校、病院、政府機関を含む）
中国大陸：300 機関以上（北京大学、清華大学、中国人民大学等）/ トライアル実施 2,500 機関
アメリカ：40 機関以上（ハーバード大学、スタンフォード大学、アメリカ議会図書館等）
日本：'20年実施の COVID-19 対応支援：無償アクセスでは 40 もの機関様にご利用いただきました



文生書院

日本販売総代理店 〒113-0033 東京都文京区本郷 6-14-7
電話(03)3811-1683 Fax:(03)3811-0296 E-mail: info@bunsei.co.jp

博士論文紹介

© 2024年度に博士学位を授与された会員の研究を御紹介します

バナナ表象から見る冷戦期東アジアの文化動態—日本・台湾を中心に— (岸川あゆみ／学位授与：名古屋大学)

本論は、冷戦期東アジアにおける文化表象と国際構造の関係を、バナナという身近な切り口から再検討した研究である。日台の文学・映画作品を横断的に分析し、生産・流通・消費を貫くバナナ表象が、植民地主義、冷戦体制、ポストコロニアル状況の連続と変容をどう映してきたかを明らかにした。個別作品の精読と同時代資料の分析を通じ、国家単位では捉え難い政治経済の動きや歴史経験、社会的記憶の層が文化表現に折り重なることを示した点に本研究の特徴がある。

分析では、日本の獅子文六『バナナ』、台湾の王童『香蕉天堂』等の作品に加え、新聞、広告、流行歌、手記、食文化資料等を収集し、20世紀の日台のバナナ表象を追跡した。日台双方の言説を併せて検討することで、表象の生成と受容の文脈を多角的に捉えている。

本論執筆を通じ、冷戦期を植民地期以来の構造が形を変えて持続した過程として捉える必要があること、また台湾と日本の関係が環太平洋の政治経済秩序に組み込まれていく構図が具体的に可視化された。とりわけ、バナナ産業自体が20世紀台湾内外の国際構造の変動を体現している点を明らかにしたことは本論の主要成果の一つであり、現在の研究課題の基盤となっている。

現在は、科研費（R7年度～R8年度、課題名「バナナ表象から見る冷戦期台湾の集会的記憶：エスニシテイ・ジェンダーの響きあい」）の助成を受け、分析軸を深める研究に取り組んでいる。これを踏まえ、今後はさらに、台湾を中心とする環太平洋地域（米国・中南米・東南アジア）との連関と比較へ射程を広げたい。

日本植民地期台湾公学校における「国語科」教育の植民地教育史的・社会言語学的研究 (合津美穂／学位授与：東京都立大学)

本研究は、漢族系児童向けの初等教育機関であった公学校の「国語科」教育に関する問題を複合的な学際的課題として捉え、植民地教育史と社会言語学の領域から解明することを試みたものである。3部構成で、序章と終章、本論（10章）、附属資料により構成される。

第1部と第2部では、日本人向けの初等教育機関であった小学校の「国語科」を比較軸として、公学校の「国語科」を教科構造、教科書の仮名遣いと教材構成の側面から分析し、「国語教育」（国民創造のための言語教育）と「日本語教育」（非母語話者向けの言語教育）の混在の様相を明らかにした。そして、教科書の教材内容の分析を通じて、植民地教育としての特徴を見出した。第3部では公学校卒業生に焦点を当てた。インタビュー調査をもとに日本植民地期から現在までの言語生活史を再構築し、その中で見えてきた日本語との関わりを、公学校卒業生以外（小学校卒業生ほか）のインフォーマントの事例を視野に入れつつ、社会言語学的な観点から分析した。日本語とともに母語や北京語の使用と言語意識についても考察の対象とし、多言語社会・台湾を生きる公学校卒業生が選択肢の1つとして日本語を使用してきた姿を記述した。附属資料にはインフォーマント33名の言語生活史を掲載した。

今後は原住民族向けの国語教科書にも研究の範囲を広げ、民族別の「国語科」教育の実態を教科書の分析を通じて考察していきたい。1920-30年代生まれのインフォーマントの談話資料の保存と活用も課題である。

研究を進めるにあたり、本会の先生方からもご教示をいただきました。また、（財）日本台湾交流協会からは研究支援を受けました。心より感謝申し上げます。

台湾におけるエクストリームスポーツの文化変容—「極限運動」の創出過程に着目して— (豊島誠也／学位授与：広島大学)

私の博士論文では、エクストリームスポーツの文化変容事例を台湾に求めている。具体的には、伝統スポーツ（宜蘭県の搶孤〔チャンゲー〕）や、諸々の伝統的文化実践がエクストリームスポーツと接合され、ローカルな文脈からナショナルな文脈へと置き換えられ、やがて「台湾文化」として認識されていく過程を、スポーツ人類学的な視点と方法によって解明している。

エクストリームスポーツとは、ロッククライミング、スケートボード、パルクールなどに代表される、危険性や極限的要素を内包し、若者文化やサブカルチャーと親和性の高い西洋発のスポーツの総称である。このエクストリームスポーツの要素が台湾においては、李登輝以降の民主化過程や中国本土との差異化、さらには抵抗といった社会・政治的文脈と接続されつつ、既存の伝統スポーツや伝統的な文化実践と結びつき「極限運動（台湾におけるエクストリームスポーツ）」として再解釈され、土着化を果たしてきたと本研究では論じる。

エクストリームスポーツの文化変容それ自体は、グローバルなスポーツメディアの文脈においても確認することができるが、国家レベルでそれを文化政策（文化創意など）やナショナルなものの形成の資源として積極的に活用推進する動きは、管見の限り台湾以外には見られない。

ではなぜ、台湾においてエクストリームスポーツは、これほど顕著な文化変容を示したのだろうか。その背景には、台湾の歴史的経験が大きく関与している。台湾への移民の過程や移民後の厳しい生活、中国本土との政治的関係性とそれに対する抵抗、加えて国際社会における「台湾らしさ」の模索といった経験の蓄積が、エクストリームスポーツに内在する「極限性」と強く共鳴したことで、その土着化が促進されたと考えられる。

「海外」へ亡命した二人—朱天文と舞鶴のあゆみ (李星雨／学位授与：一橋大学)

本博士論文は、「海外」という鍵概念を「比喩的なもの」（エドワード・W.サイード『知識人とは何か』）として新しく定義した上で、二人の台湾人作家、朱天文と舞鶴の1990年代以降の作品群について考察し、「海外」の新たな解釈によって、繋がりのないように映る両作家のあいだに存在する類似性を読み取るものである。本論文で検討したテキストは、朱天文の「世紀末的華麗」（1990）、未完成の『日神的後裔』、『荒人手記』（1994）、『巫言』（2007）と舞鶴の「逃兵二哥」（1991）、「悲傷」（1994）、『餘生』（1999）、『亂迷』（2007）である。テキストの分析を通して、二人の作家は「自分ひとりの世界」という想像空間を共有していると結論づける。慣れた土地を離れることがなくとも自分が「海外」に追放されていると想像できるように、朱天文と舞鶴は台湾という現実空間を離れず、しかし現代台湾社会において「主流」とみなされる価値観（主流的ナショナル・アイデンティティや権威的なもの）の規制・制約から逸脱することで、比喩的な「海外」—「自分ひとりの世界」へ逃亡してゆく。

本論文によって「海外」住民の肖像の輪郭を初歩的に描くことができたが、「海外」住民の肖像を活写するには、二人の例だけでは不十分である。「海外」住民も多様である。画家、音楽家、作家、あるいは一般の人びとといった、異なる分野に属し、異なる時代や地域に生活している人びとの中でも、「海外」住民という身分を持つ人は数えきれない。多様な「海外」住民の肖像画を描き続けることを今後の課題にしたい。

新入会員自己紹介

◎ 第14期理事会発足以降（2025年5月～2026年3月）に入会が承認された会員を御紹介します

松金ゆうこ (筑波大学)

筑波大学事務職員の松金ゆうこです。2026年3月までは社会人学生として、筑波大学大学院にも所属していました。私は4半世紀前、日本植民地時代の台湾観光をテーマに修士論文を書き、当時、設立間もなかった台湾学会大会で一度発表をさせていただきました。長い間研究をしていませんでしたが、思い立って再開したことで、このたび台湾学会に入会させていただきました感謝申し上げます。一貫して台湾の登山史に関心があり、2本目の修士論文のテーマは「山林開放前後の台湾における登山者教育」としました。次のテーマとしては昭和の時期、日本在住の日本人による台湾登山を調べたいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。

緒方健 (東京大学)

土業や情報セキュリティの仕事を経てアカデミアに入りました。現在は情報法・医事法及び医療情報の分野で研究をしています。

親族が台湾出身の華僑とビジネス上の付き合いがあったことから、台湾に親近感と関心を持ち始めました。

台湾に関する研究は、新型コロナ禍におけるスマートフォンの位置情報等を利用した感染症対策についての論稿が最初で、現在は台湾の情報法制、セキュリティ、憲法論について比較法学的、法制論的研究を進めております。

台湾という複雑な多面体に、私なりの関心と視点で研究を進めて参ります。皆様ご指導の程、よろしく願い申し上げます。

オウヨウ・ジェニー（歐陽珍妮） (南山大学・院生)

香港出身の留学生として来日し、日本語学校を経て南山大学国際教養学部に進学いたしました。恩師であるVolpe Angelina先生より「自分の文化のルーツを大切に」との教えをいただき、その言葉に導かれるように作家・白先勇の研究を始めました。修士課程では白先勇文学を通して戦争とディアスポラがもたらす悲しみと希望を考察し、現在は胡適、冰心、李永平へと研究対象を広げております。人間の存在や生命の意義を根源的に問い直す「宗教心」をキーワードに、文学作品と作家の人生との関わりを探究しております。

この度、日本台湾学会とのご縁をいただきましたことに心より感謝申し上げます。今後、台湾についての学びをさらに深めていきたいと考えております。

孫安祺 (東京大学・院生)

中国出身の留学生として、2014年秋に来日いたしました。2015年夏、新聞にて陳舜臣氏の訃報に接したことを契機に、その作品を読み始めました。在日台湾出身者として、戦後の日本・中国・台湾の狭間に置かれた微妙な立場や複雑な感情を描き出す陳氏の作品に強く惹かれ、修士論文では1960年代の推理小説を対象に、同時代の政治的出来事がいかに虚構として再構成されているかについて検討いたしました。現在は、陳氏に先駆けて1950年代の日本文壇にデビューした邱永漢の作品を対象に研究を進めております。このたび台湾学会に入会の機会を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。今後ともご指導のほど、何卒よろしく願い申し上げます。

田本はる菜
(成城大学)

2025年度より入会しました田本はる菜と申します。専門分野は文化人類学です。これまで台湾中北部を中心に、原住民族の人たちの手工芸（織り）や民族衣装をめぐる日常的な実践についてフィールドワークを行ってきました。最近では、原住民族と博物館の協働、原住民族文化資産のローカルな意味づけ、また原住民族女性の個人史にも関心を持っています。領域横断的な交流を通じ、皆様から多くの学びをいただけることを楽しみにしております。

薛怡冠
(一橋大学・院生)

一橋大学社会学研究科博士課程の薛怡冠（セツイカン）と申します。現在は洪郁如先生のご指導のもとで研究を進めながら博士論文の執筆に取り組んでおります。修士課程は名古屋大学で1970年代の萩尾望都『トーマの心臓』をはじめとする日本の少女マンガを研究テーマとして取り上げました。博士課程では、出身地である台湾のマンガを対象に、現代台湾マンガにおける日本統治時代の表象を中心に研究しています。私の研究関心は、台湾史をめぐるパブリック・ヒストリーの実践にあり、特にエンターテインメント・メディアがいかにして歴史記憶を再構成し、大衆的な歴史認識を形成しているかという点にあります。日本台湾学会の諸先生方、諸先輩方のご指導を賜りたく存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

横山雄大
(同志社大学)

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科助教（有期）の横山雄大と申します。戦後東アジア国際関係史を専門としており、その研究を進める過程で戦後台湾の政治外交史にも関心を抱くようになりました。とりわけ、中華民国政府が国際社会での生存を図るべく、どのような対日工作を展開したのか、日本国内の各アクターがそうした政治工作にどのように反応したのかといった点に関心を抱いております。

今後みなさまからご指導賜りますよう、何卒よろしく願い申し上げます。

花シリーズ三部作 完結！

現代台湾史を掘り起こす、陳耀昌の歴史小説



第一作

フォルモサに咲く花

下村作次郎訳／A5判 440頁／税込 2640円 978-4-497-21916-9

1867年、台湾南端の沖合で座礁したアメリカ船の乗組員が原住民族に殺害された「ローバー号」事件の顛末。原題『傀儡花』。



第二作

フォルモサの涙 獅頭社戦役

下村作次郎訳／A5判 352頁／税込 2640円 978-4-497-22314-2

1875年、「開山撫番」政策下で起こった最初の原住民と漢族の最初の戦争「獅頭社戦役」を描く。原題『獅頭花』。



第三作

フォルモサを照らす月 山脈を越えた帝国

石原嘉人訳／A5判 224頁／税込 2640円 978-4-497-22513-9

舞台を台湾東部に移し、1877年から1888年に起こった原住民族と漢族の3つの衝突事件を描く。原題『苦楝花』。



東方台湾語辞典 第2版

村上嘉英編著／四六判 572頁／税込 8800円 978-4-497-22411-8

台湾教育部による台湾語常用語辞典オンライン版、国立成功大学台湾語検定試験センター認証の難易度明示台湾語単語集（試用本）ほか近年出版された台湾語（閩南語）の辞典、教科書、学習書などを参照の上、2007年初版の語彙を増補・削減。

WEB 東方

https://www.toho-shoten.co.jp/web_toho



東方書店のWEBマガジン WEB『東方』

中国関係の書評やコラム、連載のほか、輸入図書情報や催事情報も充実。

≫≫ 好評連載中「研究会にきく」◀◀

中国同時代小説翻訳会／SNET台湾／日本杜甫学会／日本華僑華人学会／東アジア恠異学会／中国古典小説研究会／中国史史料研究会／日本漢字学会

東方書店

【中国・本の情報館】 <https://www.toho-shoten.co.jp/>

店舗 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-3

☎ 03-3294-1001 shop@toho-shoten.co.jp

営業 〒175-0082 東京都板橋区高島平 1-10-2

☎ 03-3937-0300 tokyo@toho-shoten.co.jp

関西支社 〒564-0063 大阪府吹田市江坂町 2-6-1

☎ 06-6337-4760 kansai@toho-shoten.co.jp



※御所属は開催当時のものです

第179回日本台湾学会定例研究会（関東）

『台湾の歴史 大全』出版記念ワークショップ

2025年10月11日（土）14:00～16:30

会場：早稲田大学早稲田キャンパス3号館305教室

主催：日本台湾学会・早稲田大学台湾研究所

参加人数：41人

登壇者：春山明哲（早稲田大学）、松田康博（東京大学）、
松金公正（宇都宮大学）、川上桃子（神奈川大学）

2025年2月に刊行された『台湾の歴史 大全—基礎から研究へのレファレンス』（藤原書店）は、台湾史及び関連領域の65名の研究者の協力を得て、台湾に関する歴史・地域研究の基礎知識から研究入門までをカバーすることを目的に編まれた総合的なレファレンスブックである。本研究会では、同書の刊行を記念して日本における台湾史研究の成果を振り返り、今後を展望した。第一部の記念講演では、春山明哲氏が「『知の媒介者』としての後藤新平—『台湾の歴史 大全』の刊行に寄せて—」と題して、（1）本書刊行にいたる三つの「知の源泉」であるフランスの百科全書、アメリカのレファレンス・サービス、日本の台湾研究、（2）本書の到達点と課題（「中華民国」とは、原住民の歴史叙述とは、台湾留學生の残したものはなにか、など）、（3）「知の媒介者」としての後藤新平と、台湾史研究の思想と方法についての方法序説、について80分間の講演を行った。第二部の合評会では、3名の共編者（松田、松金、川上）が、それぞれ政治史、社会・文化史、経済史を担当した立場から、本書の編集作業を通じて考えた各領域の到達点、日本の台湾研究の成果と課題についてコメントを行った。続く質疑応答では、参考にした外国史に関するレファレンスブックの有無や中国語、英語による台湾研究の扱いについて、今後の台湾研究の成果発信に関する要望、日本社会における台湾理解の急速な変化などをめぐる質問やコメントが寄せられ、活発な討論が行われた。

（川上桃子／神奈川大学）

第180回日本台湾学会定例研究会（関東）

平井清子著
『戦後台湾の英語教育：教科書にみる「文学性」と「政治・社会性」』
刊行記念講演会

2025年10月25日（土）14:00～16:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス3号館606教室

主催：日本台湾学会・早稲田大学台湾研究所

参加人数：12人

講演者：平井清子（北里大学）

コメンテーター：山崎直也（帝京大学）

本イベントは『戦後台湾の英語教育：教科書にみる「文学性」と「政治・社会性」』刊行記念講演会であり、平井清子氏が「英語教育研究と台湾地域研究を繋ぐ」と題し報告を行なった。本書は、英語教科書を分析することで、台湾社会の政治的・社会的変遷との双方向性と、台湾の英語教育の教材設計や活動を検討するものである。

平井氏は、戒厳令下では、政治色の薄い中立的な題材を通じた米国との関係重視や中国化政策の反映という「意識的中立性」が見られたのに対し、戒厳令解除後は、民主主義の深化に伴い、環境問題、人権問題、台湾文化など社会的題材が増加したと指摘した。さらに、文学教材を多用する台湾の英語教育の実践に焦点を当て、その歴史と現在の状況を問い直すことで、台湾地域研究と英語教育研究に接点を持たせた。

コメンテーターの山崎直也氏は、一見政治と関係が薄い英語教育に社会性が浮き彫りにされている点を特に高く評価し、研究の根幹に関わる質問を呈した。具体的には、地域研究における英語教育の意義、高校教科書を選定した理由、教科書が「文学的」かつ「社会的」となった要因、実際の授業実践の状況、そして今後の研究の展望についてである。これに対し平井氏は、英語教育は国家政策との関係が薄く見られがちだが、実際は社会的変化を反映するものでもあり、地域研究で扱う意義があると強調し、今後の展望を述べて講演を締め括った。質疑応答においては活発に質問が出され、深い検討がなされた。

（郭書瑜／一橋大学・院生）

第181回日本台湾学会定例研究会（関東）

『「人の移動」の国際政治』刊行記念特別講演会

2025年11月7日（金）18:00～20:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス3号館304教室

主催：日本台湾学会・早稲田大学台湾研究所

参加人数：17人

講演者：鶴園裕基（香川大学）

コメンテーター：家永真幸（東京女子大学）

本講演会は、鶴園裕基氏による『「人の移動」の国際政治』（晃洋書房、2025年）の刊行を記念して開催された。前半で鶴園氏が本書の内容を紹介し、後半では家永真幸氏がコメントを行った。本書は1945～1952年を対象に、戦後「日本華僑」と呼ばれた在日大陸・台湾出身者を論じている。彼らは戦前、パスポートを持たず往来し、日本に定住した。しかし冷戦の本格化により、パスポートを持たない状態での国際移動は基本的に不可能となった。なぜこうした事態が生じたのか。戦後の冷戦構造と国共内戦の中で東アジア地域秩序が再編され、その過程で「逸脱」を含んだパスポート・レジームが形成されたことによる。

結論によれば、冷戦期日本華僑は、居住の安定や移動の自由を確保するため、ROC／PRCいずれかの「国民」とであると主張するようになり、その結果、華僑内部の政治的分裂が構造化し、冷戦前半期はイデオロギー的境界を越える試みが直ちに政治化される国際政治状況、すなわち「国際的な人の移動の政治化」が全面的に進展した時期であったとする。これに対し家永氏は、本書が日本華僑の国際移動制約に関わる多様な問題とその重層的構造を明らかにした点を評価し、そのうえで「身分把握」の意図が明確である一方、入境・在留の「違法化」をめぐる意図については、軍事的観点からの検討を進めることでより明確になるのではないかと指摘した。会場からは多数の質問が寄せられ、活発な議論が展開された。

（魏逸瑩／早稲田大学）

第182回日本台湾学会定例研究会（関東）

合評会—松田康博著『中国と台湾』をめぐって—

2025年12月13日（土）14:00～16:00

会場：法政大学市ヶ谷キャンパス大内山校舎Y406教室

主催：日本台湾学会

参加人数：約70人

報告者：松田康博（東京大学）

討論者：川上桃子（神奈川大学）、黄偉修（東京大学）

福田円（法政大学）、門間理良（拓殖大学）

今回の研究会は、25年7月に刊行された松田康博会員の単著『中国と台湾 危機と均衡の政治学』（慶應義塾大学出版会）をめぐる合評会として行われた。はじめに松田会員が、本書の位置づけ、著者として関心をもってほしいポイント、本書を書くまでに提起してきた著者独自の概念やキーワード、中台関係研究の魅力について約30分の報告を行った。次いで、討論者として川上、黄、福田、門間の各会員が、それぞれの専門領域に引き寄せながら本書第一部「危機と均衡の歴史」へのコメントを行った。また、本書第二部「台湾海峡の未来」で著者が示した台湾海峡の今後に関する見立てについてクロストークを行った。松田会員からのリプライに続き、フロアとの討論を行った。会場からは、「本書を貫く視点や分析概念は何か」「副題にある『危機と均衡の政治学』という視点は一般化できるか」「歴史研究と現状分析を並行して行うことの難しさは何か」といったコメントや質問が出され、活発な討論が行われた。

（川上桃子／神奈川大学）

第183回日本台湾学会定例研究会（関東）

台湾研究ワークショップ「冷戦與兩岸關係—國內政治運動的對稱／非對稱—」

2025年12月17日（水）13:00～16:30

会場：東京大学駒場キャンパス18号館
主催：日本台湾学会・東アジア国際関係史研究会
参加人数：約20人

報告者：江柏煒（国立臺灣師範大學）、吳俊芳（国立臺灣海洋大学）
川島真（東京大学教授）
討論者：福田円（法政大学）

当日のワークショップは以下のようなプログラムで実施された。13:00-13:10 開幕式（川島真／江柏煒）、第一報告 江柏煒「『非対称互頼』視角下重読金門：以冷戦軍事治理及後冷戦兩岸互動為主」、第二報告 吳俊芳「從敵我到和平：兩岸戦争展示館中的歴史再現與政治意涵：以八二三砲戦為例」、第三報告 川島真「1950-60年代福建省的社會管理—依據史丹佛大学所蔵中国共産党文献—」、討論時間：與談人 福田円、閉幕式（江柏煒／川島真）。第一報告は、冷戦下の金門島の軍政とその下での対岸との対立を前提とした社会生活、またポスト冷戦期における対岸の福建省と金門島との相互関係を論じた。第二報告は、戦争を展示するという視点から、そこに見られる歴史認識と政治的ディスコースのありようを、兩岸を比較しながら考察した。第三報告は、主に1950年代における政治動員、また暴力を用いた統治のありようを、まさにミラー効果とでも言えるような状況だと位置付けた。ディスカッサントからも3名の報告者に詳細なコメントがなされ、フロアとの間でも活発な議論がかわされた。

（川島真／東京大学）

第184回日本台湾学会定例研究会（関東）

国際シンポジウム【日本統治時代の台湾におけるメディアと社会・文化・政治】

2025年12月7日（日）13:00～17:10

会場：早稲田大学早稲田キャンパス14号館402号室

主催：日本台湾学会・SNET台湾・中央研究院台湾史研究所・早稲田大学台湾研究所
参加人数：70人

開会の辞：若林正文（早稲田大学）

基調講演者：呉叡人（中央研究院）

報告者：陳偉智（中央研究院）、莊勝全（中央研究院）

王志弘（中央研究院）、李威寰（中央研究院）

コメンテーター：許時嘉（山形大学）、谷川舜（早稲田大学）

閉会の辞：鍾淑敏（中央研究院）

本シンポジウムは「日本統治時代の台湾におけるメディアと社会・文化・政治」をテーマに、1930年代の台湾を対象として、メディアを媒介とする政治・社会・文化の相互関係を多様な観点から議論した。

開会の辞で若林正文氏は、日本統治時代と自身の台湾研究期間がどちらも約半世紀であることを入口として、地理空間や歴史的主体の観点からみる日本統治時代研究の重要性を強調した。基調講演にて呉叡人氏は、1930年代前半の台湾における政治安定・経済発展・文化発展を日本の時代状況と関連づけつつ、大戦前夜の「嵐の前の静けさ」と位置付けた。

研究発表は中央研究院の4名が行った。陳偉智氏は1930年代の台湾に出現したモボ・モガを指す「黒猫・黒狗」が帯びる重層的な意味を考察し、莊勝全氏は『台湾民報』『冷語』コラムから見る東アジア情勢認識、戦前（総督府による検閲）・戦後（復刻出版過程における編集側の自己検閲）という二重検閲の存在とその意義を論じた。王志弘氏は1930年代台湾における台湾人法曹キャリアへの期待と、その実態を検討し、李威寰氏は日刊紙『台日』『新民報』の儒教記述に注目し、AI資料分析を活用した儒教言説と東アジアの文化政治の関係を考察した。

コメントは許時嘉氏と谷川舜氏から、フロアからも多くの質問が寄せられた。鍾淑敏氏が今後の展望を含んだ閉会の辞を述べ、盛況のうちに幕を閉じた。

（高橋佑可子／早稲田大学・院生）

第185回日本台湾学会定例研究会（関東）

周俊宇先生をしのぶ会：
周俊宇著、川島真監修・校訂
『日本の植民地統治と台湾人認識—「支那民族性」のまなざし—』
（東京大学出版会、2025年）の刊行を記念して

2025年12月25日（木）14:00～17:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス3号館304号室
主催：日本台湾学会・川島真研究室（東京大学）・早稲田大学台湾研究所
参加人数：40人

開会の辞：薛化元（国立政治大学）、若林正文（早稲田大学）
報告者：薛化元（国立政治大学）、若林正文（早稲田大学）、川島真（東京大学）
新田龍希（国立台湾師範大学）、家永真幸（東京女子大学）、林果顯（国立政治大学）
閉会の辞：梅森直之（早稲田大学）

本イベントでは、主として、2023年に亡くなった周俊宇氏（1980-2023）の遺著である『日本の植民地統治と台湾人認識—「支那民族性」のまなざし—』（東京大学出版会、2025年）を中心として、周氏の研究の可能性と意義について、議論が交わされた。

1部では、周氏の博士課程指導教員であり、本書の校訂・監修者でもある川島真氏が、周氏の修学の道程を振り返りつつ、氏が中華民国の国民形成への関心から出発し、研究方法を日本統治時代に展開したのち、「支那民族性」というキーワードへと到達する過程を跡付けた。

2部において、周氏の修士課程指導教員である薛化元氏は、国立政治大学台湾史研究所の成立初期から活躍していた周氏の台湾での生活、および彼が果たしてきた日台学術交流の功績を回顧した。博士論文の審査委員の一人でもあった若林正文氏は本書の第五章に置かれた台湾議会設置運動論を取り上げ、周氏が大量の言説に正面から取り組んだ姿勢を評価し、方法論的な図式、および今後の発展の可能性について述べた。

3部では、新田龍希氏が周氏の議論に含まれた「主体のねじれ」をめぐる視点について、家永真幸氏は周氏が一貫して持っていた「中国人扱いされた台湾人の台湾意識」という問題意識について、林果顯氏が周氏の政治大学在職期間の研究テーマについて、それぞれ報告を行った。また、中村元哉氏、池内恵氏、および周氏のご家族からもメッセージが寄せられた。周氏が残した言葉を通じて、台湾研究のこれまでとこれからに思い巡らす会となった。

（邱政苒／東京大学・院生）

第186回日本台湾学会定例研究会（関東）

若手台湾研究者ワークショップ2026

2026年1月24日（土）14:30～18:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス3号館606号室

主催：日本台湾学会・早稲田大学台湾研究所

参加人数：30人

司会：松葉隼（早稲田大学）

報告者：李鎧揚（早稲田大学）、頼英泰（早稲田大学）

本イベントは、最前線で活躍する若手台湾研究者を招き、その活動内容を報告するとともに、歴史研究と社会の接点を考えるワークショップである。

第一部において、頼英泰氏は17世紀台湾の国際社会での位置と、オランダ統治下の社会状況について紹介した上で、自身が考証スタッフとして映画・ゲーム・まち歩きコースの制作に関わった経験を踏まえつつ、考察を展開した。特に魏徳聖監督の「台湾三部作」プロジェクトに参加した経験を通して、研究者がどのように資料を弁別し、視覚・聴覚メディアへと翻案するのか、その可能性と困難について述べた。質疑応答においては、博物館におけるVR展示、歴史認識、当時の先住民族の状況などをめぐって熱心な議論が行われた。

第二部において、李鎧揚氏は台湾における文化資産認定制度について述べた上で、自身が関わった学校調査において発見した文物を紹介し、文物から読み取れる歴史の機微について考察した。特に皇民化時代に設置された御真影・奉安庫や、白色テロ時代を反映した報告書など「負の文化遺産」の扱い方について、日本の実例も踏まえつつ、検討を行った。質疑応答では、台湾における文化資産認定制度の問題点、収蔵の地域的な偏り、データベースの構築などをめぐって、多くの質問が寄せられた。

（邱政芃／東京大学・院生）

第187回日本台湾学会定例研究会（関東）

故宮の展示実践と阿里山文化遺産の保存から考える台湾史

2026年1月31日（土）14:30～18:00

会場：早稲田大学早稲田キャンパス3号館606号室
主催：日本台湾学会・早稲田大学台湾研究所
JSPS科研費基盤研究（B）24K03162（研究代表者：洪郁如）
参加人数：30人

司会：松葉隼（早稲田大学）
報告者：蘇峯楠（国立故宮博物院）、陳冠妃（国立台湾大学）
コメンテーター：洪郁如（一橋大学）

本イベントは、台湾から若手研究者二名（蘇峯楠氏、陳冠妃氏）を招き、台湾故宮博物院における展示企画や文化財保護に関してご報告いただき、コメンテータに洪郁如氏を迎えご講評いただいた。

第一部で蘇峯楠氏は台湾故宮博物院の概要、所蔵品などについて説明し、自身がキュレーションに関わった企画展「無界之涯（境界を超えて）」のコンセプト、展示方法、展示品の紹介と歴史的意義について論じた。特に16世紀の欧州と東アジア（明朝）間の相互認識を海図でたどり、歴史のダイナミクスを来場者に伝えるための展示上の工夫を論じた。また、長崎出土の安平壺や台南出土の漳州窯磁器の事例を通じ、世界史に台湾を見出すことを試みる、故宮における最新の展示手法を提示した。

第二部で陳冠妃氏は「阿里山林業および鉄道」が、いかにして帝国の資源から台湾初の「重要文化的景観」に登録されたのか、その変容を歴史的経緯と法制度、そして個人の記憶という観点から論じた。日本へのヒノキ輸出で近代化した嘉義は、戦後の林業終焉を経て、国民党政権下の急速な都市開発に直面する。これに抗う草の根の保存運動が、「文化資産保存法」制定の契機となり、そこで醸成された市民意識が、今日の官民協働による阿里山保護へと結実していると論じた。

コメントで洪郁如氏は両報告を大きな時系列に位置づけ、民主化以降、特に2010年代の台湾社会の変容と、博物館や民間による多層的な応答を分析した。また台湾で進む歴史実践は一方で、日本社会に「脱帝国化」などの課題を投げかけていると指摘した。

質疑応答では、故宮の展示実践の意味、阿里山地区の観光地化がもたらす弊害、そして日華関係から今日の日台交流と歴史文化資産の活用など、多くの質問が寄せられた。

（福田菜／一橋大学・院生）

第23回関西西部会研究大会

2025年12月20日（土）10:30～16:55

会場：南山大学Q棟1階103教室
主催：日本台湾学会・台湾史研究会
参加人数：会場30人、オンライン9人



【プログラム】

（※はリモートによる参加）

開会の辞：やまだあつし（名古屋市立大学）

第1部 司会：北波道子（関西大学）

- 『KANO』に見る「台湾」認識—「台湾史」として日本時代台湾を追う—
報告：三井柚奈（南山大学・修士修了）／評論：小野純子（金城学院大学）
- 「台北ゆく春会」の再設立—断絶から継承を目指すための俳句—
報告：李哲宇（名古屋大学・院生）／評論：宮原暁（大阪大学）

第2部 司会：澤井律之（京都光華女子大学）

- 1937年以降の台湾女性における社会教育の層化と再編
報告：宮崎聖子（福岡女子大学）／評論：洪郁如（一橋大学）※
- 鷹取田一郎と『臺灣列紳傳』における詩文叙述について：一覚書
報告：蔡長廷（名古屋大学・院生）／評論：やまだあつし
- 来日台湾人支援運動に関する検討—林景明支援運動を中心に—
報告：郭書瑜（一橋大学・院生）／評論：岡野翔太（神戸大学）

第3部 司会：根岸忠（専修大学）

- 現代台湾における民間防衛運動の検討
報告：松田ヒロ子（神戸学院大学）／評論：五十嵐隆幸（防衛研究所）
- 地域における国際化の文脈から捉える「新移民・新住民」についての考察—桃園市政府施策の分析を通じた中央と地方の関係における調和度の可視化—
報告：長屋敦大／評論：横田祥子（滋賀県立大学）
- 台湾の林政部門における登山者への啓発事業—「無痕山林」から「山林知事村」へ
報告：松金ゆうこ（筑波大学・院生）／評論：石丸雅邦（慈済科技大学）※

本年の関西西部会は8つの研究報告がなされた。これは例年に比して多いものである。また、単に件数が多いだけでなく、その内容も多様性に富んだものであった。分野は歴史学、文化史、社会学、行政学と幅広く、主題も映画、俳句、女子教育、社会運動、多文化政策等、バラエティに富んだものであった。しかし、これらの報告は日本と台湾、あるいは戦前と戦後という2つの要素のつながりや関係性を考察するものであったのではないと思われる。第1部、第2部の報告はこうした傾向が強くみられ、続く第3部は現代の台湾社会を分析するものであろう。

報告時間20分、コメント5分、質疑応答10分というかなりタイトなタイムスケジュールであったが、フロアを交えた質疑応答も盛況で、休憩時間や終了後の懇親会でも意見交換が行われた。

（五十嵐真子）

＊中国文庫の本＊

- **最新刊！** -----
中国現代文学と日本留学 大東和重著

A5 判上製本 368 頁 5,500 円 (税込)

中国現代文学を作ったのは、日本留学を経験した、中国の作家たちだった。

- **好評既刊！** -----
巴金とアナキズム——理想主義の光と影 山口守著

A5 判上製本 490 頁 9,900 円 (税込)

近代中国を代表する作家の一人である巴金を、アナキズムと文学という視点から考える。

- 中国の庭、台湾の庭——拙政園、留園、林家花園** 緒方賢一著

四六判並製本 334 頁 2,750 円 (税込)

蘇州園林の拙政園と留園、台北の林家花園を逍遙し幽玄な中国庭園の真髄に迫る。

- 黒い雪玉 日本との戦争を描く中国語圏作品集** 加藤三由紀編

四六判並製本 402 頁 4,180 円 (税込)

中国と日本の戦争を描いた詩や小説、エッセイ 19 篇を収めた翻訳集。

- 野蛮な文明——近代上海の通俗メディアと社会小説** 神谷まり子著

A5 判上製本 290 頁 4,950 円 (税込)

清末民初期における社会小説を論じるとともに、近代中国文学の新たな側面を見出す

- 上海の京劇——メディアと改革** 藤野真子著

A5 判上製本 360 頁 6,600 円 (税込)

上海京劇発展の全体像を複数の角度から検証する。

- 男旦 (おんながた) とモダンガール**
——二〇世紀中国における京劇の現代化 田村容子著

四六判並製本 406 頁 3,300 円 (税込)

二〇世紀の京劇がたどった現代化の道のりを、男旦と女優に焦点をあてて考える。

東アジアのなかの『論語』

(新・京大人文研漢籍セミナー2)

古勝隆一 金培懿 池田巧著

A5判並製・四二頁 一、九八〇円

『論語』が東アジアの社会でどのように読まれ学ばれ、受け入れられていったのか、その多様な側面を紹介する。

はじめに 東アジアのなかの『論語』

古勝隆一

『論語』伝播の諸側面―海昏侯竹書『論語』と新発見の『論語義疏』を通して

古勝隆一

平賀晋民の『論語』考釈―徂徠一門に対する批判をめぐって

金 培懿

西夏語訳『論語全解』について―漢文化への傾倒

池田 巧

広がることば

青野繁治監修

現代華語文学アンソロジー

A5判上製・二三五頁 三、三〇〇円

一九八〇年代以降、現代にいたるまでの中国語圏における著名な作家たちによる小説を中心とした文学作品を収めており、中国語圏について知りたい、そこに生きる人びとが何を考えているのかを知りたいという読者の知的好奇心に応えるアンソロジー。

経典をラクダにのせて

谷口義介著

敦煌の歴史と仏教

A5判並製・一九四頁 一、二〇〇円

一九九五年一〇月下旬に敦煌を訪れた著者が、訪れた先々の歴史・仏教・文化・文学に想いを馳せ、関連する様々な資料を引用しその印象を立体的に描いた旅行記。

株式会社

朋友書店

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町8番地
TEL (075) 761-1285 カルダヤ 110-0120-761285
FAX (075) 761-8150 振替 01010-5-41041
E-mail: hoyu@hoyubook.co.jp



「人の移動」の国際政治
東アジア冷戦体制の形成と日本華僑
鶴園裕基著 近代的な主権国家システムが作り出す「国境」と日本華僑との関わりを、歴史的に描き出す。
5500円



台湾総統選挙 増補版
小笠原欣幸著 台湾メディアで「選挙の神様」と称される学者による、総統選挙研究の決定版。台湾政治の三〇年がこの一冊でわかる！
3300円



現代中国という問い
辛亥革命から「中国の夢」まで
村田雄二郎著 伝統・近代・現代の三層構造からなる巨大な複合国家・中国。多様な相貌を見せる現代中国を歴史から読み解く。
7040円



「歪情報」の政治学
アメリカの台湾政策を読み解く
村上政俊著 新たな情報モデルである「歪情報仮説モデル」を提唱し、アメリカの台湾政策の変遷可能性について理論的に解析。
3080円



「現代村落」のエスノグラフィ
台湾における「つながり」と村落の再構成
前野清太郎著 日本・中国との異／同比較の壁を超えて、台湾農村から先進諸国に通じる新たな「現代村落」モデルの構築を試みる。
5610円

晃洋書房

〒615-0026 京都府京都市右京区西院北矢掛町7番地
TEL 075 (312) 0788 / FAX 075 (312) 7447

※表示価格は税込

全世界で1,200以上の学術機関が利用

台湾聯合百科電子出版会社 オンラインデータベース



台湾に本拠を置く学術出版社である台湾聯合百科電子出版会社 United Digital Publications Co., Ltd. (UDP) は、漢学と台湾研究を専門分野とし、優れた学術誌や歴史のある雑誌などをデジタル化してきました。

AI多言語自動翻訳機能も導入し、台湾の研究者の視点だけでなく、世界中の漢学・アジア研究に関心のある学術誌との連携をはかり、新たな知見を生み出すことを目指しています。

UDP 既刊 オンラインデータベース ～ 雑誌、古典、美術分野 ～

Journal Series

Sinica Sinoweb 中研院經典人文學刊
Taiwan Journals Search 臺灣人社百刊
Taiwan Epochal Democracy Magazines 臺灣經典民論雜誌
The Continent Magazine Archive 大陸雜誌
Zhuanji Wenxue Digital Archive 傳記文學全文資料庫
Modern China Database 近代中國雜誌

Classic Series

Biaodian Guji Tushu Jicheng 標點古今圖書集成
Taiwan Wenxian Congkan 臺灣文獻叢刊
Taiwan Wenxian Congkan: Continuation 臺灣文獻叢刊續編

Art Series

National Palace Museum Journals Archive 故宮期刊知識庫
LionArt Digital Archive 雄獅美術知識庫
Chinese Calligraphy and Inscription Collection 歷代書法碑帖集成

*各データベースの価格、収録明細などの詳細はお問合せください。

小社 Library Navigator もご覧ください。

https://kw.maruzen.co.jp/ln/ec/ec_udp01.html



台湾聯合百科電子出版会社 / 日本代理店 丸善雄松堂

M MARUZEN-YUSHODO

丸善雄松堂株式会社

学術情報ソリューション事業部 企画開発統括部

e-mail: e-support@maruzen.co.jp

無料トライアル
受付中！

(個人・機関ともに1ヶ月間)

入退会等（2026年3月11日
の常任理事会承認分まで）

編集後記

非公開

◎ 学会事務局より会員の皆様へお願い◎

帰国等の事情で学会活動ができなくなった場合には、退会の届け出が必要です。退会される場合には、必ず「退会届」を御提出下さい。提出が遅れると在籍扱いとなり、その間の会費を請求せざるを得ませんので、どうぞ御注意下さい。また、学会活動を継続して頂ける場合は、住所変更の届け出をして下さい。

今回、新入会員の自己紹介コーナーと、前年度に博士号を取得した会員の研究紹介コーナーを新設しました。新規に入会された方には事務局の情報を使って電子メールでご連絡差し上げましたが、うまく連絡が取れなかった方もいらっしゃると思います。今回自己紹介を掲載されなかった方は次号に掲載させていただきますので事務局にご連絡ください。また2024年度に博士号を取得された会員のうち、今号に研究紹介を掲載されなかった方も、ぜひ事務局にご連絡ください。次号に掲載させていただきます。

（松田ヒロ子）

バックナンバーをしっかりと確認したわけではありませんが、「社会言語学」という言葉が複数の記事（特集と博論紹介）で登場したのは、50号を数えた本学会のニュースレター史上でも珍しいことなのではないでしょうか。陳麗君会員も指摘されているように、多言語社会台湾を対象とする学会にしては従来この種の研究が手薄であったのは事実でしょう。社会言語学を専門とする自身の責任も改めて自覚しつつ、今後の展開に期待したいと思います。

（吉田真悟）

日本台湾学会ニュースレター 第50号

発行：日本台湾学会（理事長：川上桃子）

発行年月：2026年4月

日本台湾学会事務局

jats.jimukyoku[at]gmail.com

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 松田康博研究室気付

ニュースレター発行事務局

hirokomatsuda[at]gmail.com

〒650-8586 兵庫県神戸市中央区港島1-1-3

神戸学院大学現代社会学部 松田ヒロ子研究室気付